

平成31年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる「共同利用型」の個人による研究 研究報告書

令和2年4月17日現在

研究課題名	19世紀後半、ガリツィア巡幸とハプスブルク帝国における巡幸報道の動向	
申請者	氏名	所属機関・職
	佐伯 彩	奈良女子大学大学院博士研究員

研究成果の概要

申請者は、19世紀後半のハプスブルク帝国におけるガリツィア巡幸をとおして生じたガリツィアとそのほかの領邦との政治的関係をつうじてみられる、ガリツィアの社会的立場について考察している。本研究にあたり、本年度の貴学における研究は、領邦間の新聞報道にみられるガリツィア領邦と他領邦間の関係を分析するうえでの研究基盤作りに専念することにした。そして、その基盤として、申請者の理解が十分ではないガリツィア選出のポーランド人議員の政治活動に関する知識の修得ならびにポーランド人議員関連の史料収集を目標とした。

まず、夏季休暇（8月18日～22日）において、ハプスブルク帝国に関する先行研究の調査に集中した。この調査によって、本学において、ガリツィアの領邦関係を語るうえで、押さえておくべきガリツィアを含むハプスブルク帝国の社会状況に関する文献が数多く所蔵されていることを確認した。そして、冬期休暇を使用してそうした文献・資料を収集することにした。

冬期休暇（12月18日～28日）においては、夏季休暇で確認した先行研究の洋語文献、ならびに、1868年～1871年のオーストリア帝国議会議事録の速記録の収集に集中した。また、空き時間には先行研究の精読にあたった。本学の図書館を通じて、ハプスブルク帝国議会議事録の速記録を入手した。また、収集した先行研究などを分析し、オーストリアとガリツィアの各行政並びに立法機関のパワーバランスを整理することができた。

これについて、3月にハプスブルク史研究会で、その中間報告の発表を予定していたが、新型コロナウイルスの発生と拡大にあたり、研究発表が延期となった。そのため、本研究をさらに発展させ、令和2年度9月に開催予定ドイツ現代史研究会大会での口頭報告を目指す。

主な発表論文等（雑誌論文、学会発表、図書 等）※謝辞の有無について明記願います。

特になし

当該研究活動を基に応募中の研究プロジェクト（科研費等）

令和2年度日本学術振興会科学研究費情勢事業(若手研究)採択

研究課題名「19世紀後半ハプスブルク帝国と諸領邦との相互認識—ガリツィアを事例に—」

研究番号 20K13216

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。